
袋小路の奥に

新品の靴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

袋小路の奥に

【著者名】

ZZマーク

【作者名】

新品の靴

【あらすじ】

ある少年のおはなし。

「ひづん。

目の前の石を蹴る。

見上げればどんよりとした雲が空を覆い、こっちの気分までふさがつてしまつ。

マンションから追い出された僕は、ただ行くあてもなこままぶらついていた。

ただちよつとだけ片付けをし忘れてただけなんだ・・・。
いや、し忘れてたんじゃなくて、後でしようと思つてたんだ。
なのに疲れてるからつて母さんは僕にやつあたりするんだ。

「あーあ。晩御飯まで帰れないなあ。」

僕のマンションは町を見下ろせる丘の上にあったから、迷つことはないと思つてた。

なのに坂を下りながら路地を右へ左へと当てもなくさまよつていると、全然見覚えのない場所まで来てしまつた。目印となるマンションも見当たらない。人もいない。周りの塀がやけに高く感じじる。うつすらとこみあげてくる感情を抑えながら、来た道を戻ろうと努力する。

だんだんと暗くなつて。

雨もぽつぽつと降り出して。

もはや歩いてはいられなかつた。

マンションを出たことがはあるか昔に感じられた。

あの暖かい家に帰れるならなんだつてします。

僕は神様に何度も頼んだ。

「へやつ。行き止まりか・・・。」

押し迫るよつた袋小路にぶち当たるたびに不安が膨れ上がる。

「また、ここもか・・。」

戻ろうとしたら。

「とおりぬけ、できます。」

左奥の壁の隅っこに、そんな看板がかかっていた。

やっぱり迷う人もいるんだ。そりやそうだよな。今までにこのあたりで迷ったのは僕だけじゃないはず。そこからたぶん大きな道に続いてるんだろう。

だがしかし、看板の側に来ても左右は壁。道なんて続いてなかつた。

「なんだよこれ・・・。いい加減にしろよ・・・。」

確かに僕の読みは外れていなかつた。確かに、この辺で迷う人はいる。でもそれを逆手にとつて、その希望を踏みにじろうという魂胆か。

「こんな看板・・・。」

つま先で軽く蹴ると、コンといつ浅い音がした。

「ん?」

こんどはその壁をノックしてみる。

コンコン

なんだこれ。コンクリートの壁に見せかけたハリボテ？
こんどは思いつきり強く蹴る。不安を足の一点に溜めて。

「い、の、や、ろつ」

ガンといつ音がして、ちょっと焦つた僕は早足でその場から逃げだす。

はずだったのだが。

みごとにコンクリートにカモフラージュされた扉が開き、その奥には地面がぱっくりと割れて階段が見えないとこ今まで続けていた。
なんだこれ。誰かの家の倉庫？

地下へ続く階段から、ぶわっと熱風が吹きつけた。

「ここにおい・・・。」

どこか異国を思わせるよひな、いろいろな言ひ方が混ざったおいでが全身を包む。

好奇心。

不安。

「そんなもん・・・。」

行くにきまつてゐる。

僕の声が残響となつて響く。

遙か下に、黄金がとろけたような光が見える。

その光が大きくなるにつれて、喧騒の声がどんどん大きくなる。よく耳を澄ませても、明らかに日本語ではない。

「インド語みたいだな・・・。」

不安を潰すためにそう咳いてみたけれど、今は何の役にも立たない。ふつと母さんのことを思い出す。

もしかして今とても危険なところにいるんじゃないだろうか。もう永遠に戻つてこれないんじやないんだろうか。

じわりと涙が田を濡らす。

だけど帰れなかつた。何があるのか、知りたかつた。

・・・・

こつん、こつん。

そうして最後の一戻を降りきつて、恐る恐る扉を開ける。

「うわっ」

眩しくてぎゅっと田をつぶる。無防備になつた自分に本能が警鐘を鳴らす。

だめだ。田をあけるんだ。よく見る。

そこは大きな、大きな商店街のようだった。そつ、あの中国とか印度にありそうな「たごたした感じ」の。いろんなお店。いろんな人。いろんなにおい。いろんな音。父さんがよく言へ、活氣あふれる、とほほいうことなのか・・・。

うずくましくてきた。
うずくましくてきた！

別世界！

まるで物語のようだ。

僕はためらわずにその世界へと足を踏み入れた。

・・・・

ぐうとおなかが鳴るのがわかる。そりやそうだ。マンションを出てからずつと歩きっぱなし走りっぱなし。おいしそうなお肉、見たこともない野菜、芳醇な香りを漂わせる果実。所狭しと並べられているのに、手が出せないのはなんともじれつたい。

「入ったはいいけど、どうしよう・・・。
もどる、べきか。

このままもしかしたらこの世界にのまれてしまふのかもしれない。と、とりあえずさつきの場所をちゃんと確認しておこう。

・・・・

「ん？」

僕は後ろへ向いた。うん。そこまではよかつた。なのに、・・・

「ど、どうして？あ、し、が、」

懸命に足を前へ出そうとしても、足自体がとても重くなつて、進むことができない。

汗が噴き出す。

待て。落ち着け。

横は？

すると今までのことがなかつたかのようにすんなりと足は動いた。また戻るうつとすると、動かない。

「ということは、自分の進んだところからは、もう戻れない……」

大変なことになつた。戻れない……。

でもそんなこと考へてるヒマなんてなかつた。はじめて。

やつと。

本で読んだことしかない「魔法」に、初めて触れることができたらだ。

僕は何度も何度も戻るうつとして、そのたびに重くなる足を不思議な目でみつめた。

とりあえず、と、灯火の柱の側に腰を下ろす。

幸いなことに人が多すぎるせいで誰も僕に関心なんて向けない。

とりあえず、僕に残された選択肢は2つ。

このまま残るか。

先へ進むか。

でも先つてどっちへ？この入り組んだ商店街の中僕はどの道を選択すれば元に戻れるのだろうか？

ぐう。

またおなかが鳴る。

誰かに話しかけようか……。

しかしそばを通る人々は皆忙しそうで、もし怒られたりしたらどうしようかとも思つて、なにもできないでいた。

「どうしよう……。」

正直僕は期待していた。

誰かが助けてくれるのを。手を差し伸べてくれるのを。どうしたのつて。物語ならそうだ。でも現実はそうはいかない。

「よいしょ・・・と」

重たい腰をゆっくりと上げる。仕方がない。誰かに聞こひづ。どうすればいいのか。

先を急ぎすぎては取り返しのつかないことになりかねないけれど通りの人の流れがはやくってははやくって、気がつけばかなりの距離を流されていた。はやくしないと……。焦りだけが先行する。

よし……。あの店の人なら聞きやすそうだ……。

肌の焼けた若いお兄さんが立つ店は、その若さとは対照にとても古ぼけていた。

思い切って店の前に立つ。

「あ、あの。すいません！」

この世界の住民との初めての会話。

「ん? 何か用?」

わかる……。

理解できる。

耳に入つてくる音としての言語はさっぱり何語かもわからなかつたけれど、どうしてか頭では何を言つているのかがわかる。これも魔法……。

初めての会話の成立に達成感を噛みしめていると、店の人は不思議そうな顔でこちらを見る。

「何か買うの?」

ずらりとならべられた食品、文房具、服、アクセサリーを買つお金なんて僕はない。

「いえ、その、あのー……お金ないので……。」

そんなことを言いに来たのではなかつた。

何から聞けばいいかわからなかつた。

「君、もしかして、初めての人?」

「え? あ、ハイ……。」

「へえ……。めずらしいね。最近じゃあんまりこないんだけど

ね。ところが、君はすぐにもう出て行くんだね。」

どういう意味だろ？ そんなに簡単に出られるのか。

「あの、それって、僕のいた世界にすぐ戻れるってことでしょうか？」

聞きながら思わずやついてしまう。魔法の力で自分の知らない言語を自分が話している！ それがなんとも奇妙でこそばかっただ。

「そうか。君はまだ何も知らないんだね。てことは、君にとつて僕が初めての人かな？」

「はい・・・正直誰に話しかければいいか分からなくって・・・」
ハハハと朗らかに笑う。こんなかっこいいお兄さんになりたいなと思つた。

「そりゃそうだよな。ううんとね、この場所には2種類の人がいて、ひとつは僕らみたいな、この世界に住んでる人。まあ縛られてるつて言つてもいいけど。もうひとつは、君みたいに別の世界からここへ来る人。正直その人たちがどこから來るのかはみんなさっぱりわからない。でも一つ、確実に言えることがある。君たちは、帰れる。絶対に。」

しつかりとそう言つ彼を見て僕は思わず。

「不安だつただろう。みんな最初はそうなる。君よりももつと大きい人だつて安心して泣くもんだ。だからもう大丈夫。君たちにとつて、この商店街には、終わりがあるらしいんだ。もちろん僕たちは行けないけどね。この商店街をずっと歩いていると、突然終わりが来るらしい。とにかく今まで來た人はみんなそうやって突然来て突然帰つていく。ほんの少しの時間だけここにいるんだ。どうしてかはよくわからないけれど。」

突然来て、突然帰る。ほんの少しの時間だけ、ここにいることができる。

この世界は安全で、そしてとても儂いものなのか。

まるで夢のように。
「そうか。夢なのか。魔法なんて現実にあるはずがない。ここは夢の世界か・・・」

「ねーこじにはめる装飾品なんだぞやー、つてあれ? ここの子誰? 見上げると美人のお姉さんが立ってる。ただ背中から木が生えてるんですけど。

「さつまこじの世界に来た子。こまこじの世界の理を教えてたの。装飾品なら、確かあの棚に・・・」

「くえーこんな子供でも来るんだー。私、ミニア。短い間だけぞ、よろしく。」

緑色の澄んだ瞳で僕を見る。うん、いい人だ。

「僕、リュウタです。よろしくお願ひします。」

「リュウタって言つんだー。いい名前だね。ここの世界のこと、ちよつとはわかつた?」

「まあ・・・肝心なところは。」

「まーすぐに帰っちゃうだらうけど、ゆっくつしていってね。」

こじこじ

あつたかい。

「はいこれ。はめてみて。」

色とりどりの宝石がちつぱめられた装飾品はすんなりと元の鞄にはまつた。

「ぴつたし。ありがと。」

「どういたしまし、て。今度メシおごつてね。」

「やつぱりー。ほんとアンタ面倒くさいよね。」

仲いいんだなあ・・・。

「今からどうする?」の際だしこじで、「飯でも食べてこきなよ。お代はこの太つ腹なお兄さんが払ってくれるらしいし。」

「え? いやお金ないつて! そもそもこの店が儲かってると思つ? ・・」

「じゃーこじちこじち。すつごくおいしい店があるから。たらふく食べて帰りなさい。」

「人の話を聞けつて・・・。」

その店は右に左に曲がった狭い路地にひつそりとしかじぢりしつと

構えていた。

店に入ると、1階はどうみても書斎の様を呈していた。入つてすぐ奥に書斎机が存在感をひたすら示しており、それを囲む幾千もの本が知の空間を創っていた。

「え・・・。こいつて本当に店なんですか？」

「2階にあるの。変わってるでしょー？まあそのせいでお客さんは全然こないんだけじね。でも味は保証できるから大丈夫。」

そう言いながら本の山をかき分けながら部屋の奥にあつた細い階段へ向かう。

「店長はちょっと変わった人だけじ、でもいい人だから。」

2階へ上がつてみると、これまた狭い部屋だった。いや、狭いんじやない。厨房が場所をとりすぎているのだ。部屋の3分の2を占める巨大な厨房に、髪を結んだかいつい男が一人腕を組んで立つていた。

「いらっしゃ・・・。」

「いつもの3つ。お代はスニーが払うつて。」

「・・・あい。」

せつかくの店長の最初の一聲はミニアの声にかき消されてしまった。
哀れ店長・・・。

「ほんとお金ないんだつて・・・。」

なるほど、このお兄さんの名前はスニーといふのか。
ミニアとスニー。

覚えた。

「ん？このボウズは」

「リョウタくん。ちつきいの世界にきたばっかりなの。」

「ほわ。よりし・・・」

「リョウタくん。彼が店長。・・・ね？変わってるでしょ？話すのがとつても遅いの。」

「いえ、それはあなたが速いだけなんじゃ・・・。」

「でも大丈夫！料理作るのだけは速いからー。」

声のボリュームを落として言つてゐつもりだけじゃある聞こえたと思つ・・・。

店長の額にしわが生まれ始めてる・・・。

「よ、よろしくお願ひします。」

「お前は何の為にこれから生きていく。」

「え?」

「店長は哲学が好きなんだよ。だから初めての来客者にまじつして問題を与えるんだ。」

スマーがそつと囁いてそう言つてくれるが、なんの助けにもなつてない。やっぱりミヨが言つようになつて変な人だ・・・。

「どこの世界に生きていようが関係ない。お前は、これから何をして何の為に生きていくのか。」

「わ、わかりません。未来は読めません。」

「違う。未来の話について言つているのではない。お前の意思を聞いているのだ。」

店長の眼光は鋭い。

僕は。

僕はこれから何の為に生きていくんだらうか。

心の中の現実の扉がゆっくりと開いてゆく。

学校へ行き。

勉強をして。

毎日が毎日として経つていき、

気づけばスーツを着た個を失った人間みたいな何か。

主体性を持たず、ただ流されて生きるだけの予測できる人生。

楽しみも悲しみもあらゆる感情は許容範囲内に收まり、

法則を打ち破るほどの情熱もエネルギーも持ち得ずに一生を終える。

答えは明快だ。

そんな世界に戻りたくないなら、ずっとこの世界に居ればいい。

戻ることができないなら。

進まなかつたらいい。

魔法があるじやないか。

僕の大好きな魔法が。

「僕は、戻りたくないです。」

スフーがはっと息をのんだのが分かつた。

「答えになつてないぞ。」

「わかつてます。でもあんな世界に帰るなら、こっちの世界にいたほうがまだ生きる目的が見つかりそうです。」

「お前は本当にそう思うのか。」

「はい。ここには活氣があるし、みんない人だし、魔法だつてあるし。」

「・・・いるよ。そういう人。」

そう呟いたのはスフーだった。

「え？」

「ここにときどき別の世界から人が来るのは聞いたよね？たまにね、そういう人たちの中で、帰りたくないって言う人がいるの。君が今言つたようにこの世界は自分の世界よりもいいからつて。もちろん私たちは強制的に送り還すこともできないし、事実なんの迷惑もかかつてないからね。」

「じゃあ・・・」

「最初は」

「最初はいいの。この世界を楽しんでるし、進みさえしなかつたら

ずっと居れるからね。中には店を構える人もいたわ。でもね、だんだんと、気になつてくるの。元の自分のいた世界が。日を追うごとに商店街の先を見つめるようになり、だんだんとこの世界で生きる活力を失つてしまつた。以前は笑顔で私たちと接してくれていたのに、最後にはちゃんとした会話すらできなかつた。

「なにか、なにかあつたんだろうか。」

「どうして、そんなことに・・・？」

「現実があるからよ。自分の還る世界がある限り、自分の存在というものは落ち着いていられないの。例え還る場所がどんなに辛いところでもね。」

「だから、店長は聞いたんだよ。君が逃避の目的のためにこの世界に居続けるんじゃないかと危惧してね。」

柔らかい視線でスフーはそう言つてくれる。

「私の質問に答えるのは今すぐじゃない。だが必ず、自分の世界に戻つても、答えを見つけるんだ。」

そう言つて店長は厨房の奥へと消えていった。

「まあ、ここに来た人は誰でも思つたのだから。店長も怒つて言つてるわけじゃないし。」

「うん。ありがとうスフーさん。」

「あの、さつきの人の話なんですが、その入つて結局どうなつたんですか？」

フンと鼻を鳴らしながらミヨが言つた。

「私たちが勧めたら、嬉々として現実に帰つて行つたよ。傷つくなはじつち。」

「//ミ。言つすぎ。・・・その人、結構ここに居たし、//ミとは仲が良かつたから、最後はよけいに辛くなつちやつてね。//ミも相当精神的についたんだ。」

窓の方を向くミヨは何を思つているんだろうか。

確かに、そうかもしれない。ミヨやスフーにとつては、こここの世界

が現実。そこへ僕らがやつてきて、現実が嫌だからここに居たいと言つ。なのに最後は、現実に帰りたいからここには居たくないと言つ。

それに振り回されるこの世界の住民たち。
なんて、僕らは身勝手なんだろう。

この人たちは自分の世界で懸命に頑張っているというのに。

גָּדוֹלָה וְמִתְּנַכֵּן

そういうことで僕はホケットからあるものを取り出す。

「……が、業界の競争力。」「それはもう、あります。

「え？ でも」

「もし『アーラン達が仮』にも僕の世界に来れた時は、ぜひ僕ん家に来てください。よくわからないけど、その鍵が『アーラン達と僕とを繋げてくれる』気がするんです。それとも一つ、その鍵には意味があります。」

「もし今度、僕みたいな他の世界の人が来たときは、その鍵を見せください。そうすれば、その鍵を見る度に、その人にとっての現実の扉が開きます。だから、ミヨさんもその人もこれ以上苦しむことはなくなります。」

え・・?どういふ・・?

「ほう、ボウズ、もう魔法が使えるようになつたのか。」

おいしそうな料理をこちらに運びながら店長が言う。

三田が詰つたり】料理作るのは格段に卑いんだ・・・。

「どうせ」たのかは、僕も分からんんですか。でもたぶん、これ

か最初で最後な気がします。

「…あら、おまえ、おまえが…」
「…おまえが…」

「えーいーですよそんなー。」の料理のお返しですよー。」

おいしい料理をほおばりながらあれやこれやと話していると、

「あ、これ丁度いいんじゃない？」

それは、鏡にカケラのようなものだった。

「あれ？ でもこれ、反射してない・・・」

「そう、これは光を反射するんじゃなくて、光を吸収するの。本当の暗闇になつたときに、その溜めた光を発散するらしいの。あいにくこの世界はいつも光に満ちてるから言い伝えだけだよね。しかもクアンネの沼の10杯分も溜まるんだから！」

「クアンネの沼？」

「そう、この地下世界最大の沼。世界最大って言つてもこの世界自体あんまり大きくはないんだけどね。」

「地下に沼が・・・すごい。」

「ここから近いからあとで寄つてみようか？」

「うん！ 行つてみたい。」

そうして僕は鍵と引き換えに、鏡のカケラを貰つた。首に下げた力ケラは頬りなさげに揺れていた。

よろしく。僕が新しい主人だよ。

最後のデザートに取り掛かるふとした時、外から大きな砲撃音がした。

1発、2発、3発・・・

爆音のエネルギーで窓が揺れ地面が震える。

「あ、あの・・・どうなつたんですか？」

振り向くスフーとミヨは驚きを顔に表していた。

「始まつた・・・」

「始まつた・・・？ もしかして何か暴動とか起こつたんですか？」

ただならぬ気配に身構える。

「いや、いや、違う違う。誤解させちゃって悪いね。この砲撃の合図は、滅多に見られない一大カー二バルの始まりの合図なんだ！」興奮気味にそう語るスフーを見て、そのカー二バルとは相当凄いものなんだと察しがついた。

「ほり、リュウタ！ あんた運いいよ！ 早く行こう！」

「店長、じちそうせまー！」

「あの、店長、こりいろと、ありがとうございました。」

「店長、今回もお金はまたいつか・・・」

急いで階段を下り、通りに出てみる。

さつきと比べて刻々と人の数が増えている。急がないとこの人の増え方ではすぐに行き詰まるだらう。

「はやく！」

スフーが先頭に立つて人ごみをかき分け、ミコに手を引っ張られながらどんどんと進んでいく。

聞いたことのない音楽がだんだんと聞こえてくる。

「やつぱりあのカー二バルだ。あの音楽はもうひょひょっとで始まる合図だ！」

ますます走るスピードを速める。

スフーさん、頼もしいなあ。

ミコさんの手、あつたかいなあ。

だんだんと音が大きくなつていく。
もうちょっとだ。

熱気がすごい・・・。

急に視界が開ける。

「ほら！ あれ見・・

・・・・あんまり時間が経っていないのは直感で分かった。
おそらく僕があの階段を下り始めてから数分しか経っていないだろう。

僕が目にしたのは一大カー二バルではなく、見慣れたいつもの大通りだった。

雨に塗られながら、僕はしばらくただ茫然と立っていた。

こんなにもあっけなく終わるものなのかな。

期待と虚しさを込めて振り返っても壁しかない。

そういうえば、あっちの世界の空気はこもつてたな・・・

突然な現実に頭がついてゆけない。

こんなにもあっけなく終わるものなのかな。

僕はどうしたらいいんだろう・・・

あの世界はなんだつたんだろう・・・

僕の心を虚しさが支配していた。

楽しい想像からふと現実に戻つて今の楽しい気持ちは想像から來てたんだと思った時みたいな虚しさだった。

動く気にすらなれない。

僕はだんだんと焦り始めた。

自分自身の脳があの世界を否定し始めていた。

これが現実の強さというものか。

あれだけの刺激を受けたところに、現実に帰結しただけでもう疑い始めてる。

・・・?

現実がほかのどこの世界よりも強いと言つたのは誰だけ？
それこそが、向こうの世界へ行ったことの証明じゃないか。

ミヨヒスフー、そして店長の出会いが、僕の考えを変え、そしてそれは世界を隔ててもちゃんと受け継がれてる。

現実にちやんと向き合おうとする度に僕はある世界を思い出すだろう。

だから僕は絶対に忘れない。

お家に、帰ろう。

そして母さんに、謝ろう。

もつと、いろいろなことを考えよう。

「うん。」
「ただいま。」
「リュウタ！あんたこんなに濡れて・・・」
「母さん、『じめんなさい。』
「・・・もういいから、風邪引くから熱いシャワー浴びてきなさい。」

「あら・・・？あんた変わった匂いしてない？」

「ああ・・・途中で、雨宿りのついでに変わった店に入つてたから
だと思つよ。」

「へえー・・・なかなか楽しんでんじやない。」

皮肉っぽくそう言つ。

帰れてよかつた。

いそいそと浴室へ向かい服を脱ぐ。

「あ・・・」

そういうえば、もうひとつ証拠があつたな・・・。

反射しない鏡のカケラ。

「不思議だなあ・・・こつちに戻ってきたらちゃんと鏡になつてる
じゃないか。」

ああそういうことか。吸収できる光は向こうの世界だけ。こっちの
光はやっぱり違うのかな。

シャワーを浴び服を着て一息つく。

遠くの方ではもう雲が切れかかっていて隙間から夕日が差し込んで
くる。

眩しそうに田舎を細めながら、僕はニタリと笑つ。

頑張つて、生きるか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3335p/>

袋小路の奥に

2010年12月6日04時29分発行